

教育実践論文

自分事として社会的問題解決を実践する児童の育成 — 5年生「国土の環境を守る」の単元を通して—

小林 貞幸*

Nurturing Children who Practice Social Problem Solving on their Own
through the Unit of 5th Grade "Protecting the Environment of the Land

Sadayuki KOBAYASHI*

【要約】

社会科で学ぶ対象は大人の社会のものごとであり、子どもにとって身近ではなく、他人事である場合が多い。それらの社会的事象との出会いの場面において疑問を見つけたり、疑問について調べたりすることで身近なものになっていく。社会的事象と自分とのつながりが感じられるようになって初めて、「自分だったらどうするのか」と自分事として社会的事象に関わり、社会的な見方や考え方を働かせながら問題解決を行っていくことができるだろう。しかし、問題解決に向けた一連の活動は必ずしも実社会での行動を求めるものではない。本研究では、社会的問題の解決策について議論したり、学習した成果を関係諸機関に提案したりすることも実践の一つの形と考え、児童のこのような活動を「実践する姿」として捉えることとする。自分事として社会的問題解決を実践させるために、単元の初めに具体的な資料を使って現実の社会的問題と出合わせ、疑問に思うことを挙げさせたり、予想させたりしていく。その過程で何が問題なのか明らかになり、自分とのつながりに気付いたり、解決の道筋を立てたりしていくことができると考える。また、解決すべき事柄を意識させながら学習を進めていくために、児童の疑問や予想を大切にしながら学習計画を立てることも必要と考える。その実践例を述べる。

【キーワード】

国土の環境, 有明海, 自分事

I 研究の構想

自分事として社会的問題解決を実践させるために、単元の初めに具体的な資料を使って現実の社会的問題と出合わせ、疑問に思うことを挙げさせたり、予想させたりしていく。その過程で何が問題なのか明らかになり、自分とのつながりに気付いたり、解決の道筋を立てたりしていくことができると考える。また、解決すべき事柄を意識させながら学習を進めていくために、児童の疑問や予想を大切にしながら学習計画を立てることも必要と考える。そこで、以下の2点を柱として研究を進めていく。

柱1. 自分事として学ぶ場の工夫

- 社会的事象との出合わせ方
- 児童の意見を取り入れた学習計画づくり

柱2. 社会的事象の見方・考え方をういた試行錯誤の場の工夫

- 児童が自分事として選択・判断できる論題の精選
- 議論のコーディネート

II 研究の詳細

1 自分事として学ぶ場の工夫

自分事として学ぶことができようにするために、単元の初めに現実の社会的問題を提示し、疑問に感じた事や気付きを話し合うことで、身近な問題として捉えさせていく。

例えば、4年生の「命とくらしをささえる水」の単元では、まず、嘉瀬川ダム貯水量が減り、様子と違う写真を提示する。貯水量が少ない状態のダムを見て気付いたことや思った事を自由に出させ、水に対する興味・関心を高める(図1-1)。次に、現在の貯水率が20%を下回っている事実を伝え、それに対して疑問に思った事や気付いたことを挙げさせる(図1-2)。さらに、児童の疑問や気付きをつなぎながら、水に関わるイメージマップを作る(図1-3)。

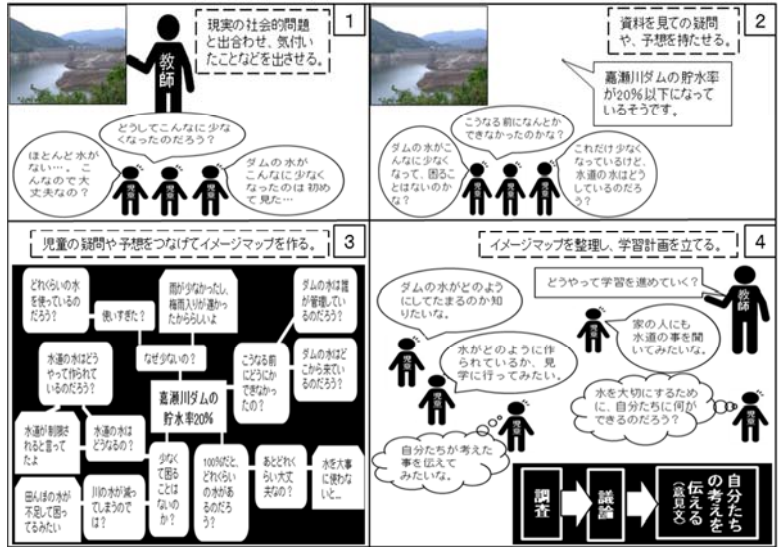


図1 自分事として学びを展開するイメージ

その過程で、「水道と自分との関わり」「貯水量不足が引き起こす問題」「水道事業が自分たちの生活の中で果たす役割」「水道の安定供給のために自分にできること」など、水道事業に対する視点を持たせたり、水道事業に関する様々な事象の関連について意識させたりすることができる。また、作成したイメージマップをもとに学習計画を立てるようにすることも重要となる(図1-4)。疑問に思った事や予想した事をどのように調べるのか、調べて分かった事や考えた事をどのようにまとめていくのか等を考えさせながら、学習計画を立てていく。そうすることで、児童が見通しを持って学習に臨む事ができるとともに、自学等で情報を集めてくるなどの主体的な学習につなげることができると考える。

このように、単元の「つかむ段階」数時間を使い、児童の思いをていねいに扱っていく。最初に資料を見たときは漠然としていたことが、整理する過程において何が問題なのか明らかになり、解決の道筋が見え始める。そのことにより、今まで考えたことがなかった社会的問題を自分事の問題として捉え、問題の解決に向けて自分にできることは何かを考えながら学びを展開していくことにつながっていく。

2 社会的事象の見方・考え方をういた試行錯誤の場の工夫

問いを解決するために調べたり考えたりしてきたところで、試行錯誤の場を設定する。試行錯誤の場とは、「AかBか」「Cをするために優先すべきことは何か」など、論題を基に議論する場とする。社会的事象の見方・考え方をういて議論できるように、発達の段階に合わせて教師がコーディネートする。

例えば、5年生の学習で「有明海を再生するために優先すべき事業は何か」と論題を設定する。その論題には、「有明海を元気にしたい」児童の思いと『持続可能性』『連携』の見方で『総合する』考え方をういてほしい」教師の意図が働く。その見方・考え方をういるためには、各提案を整理することが重要となる。そこで、児童自身や教師の板書で思考の可視化を行ったり、児童の発言に対してゆさぶりをかけたりするなどしながら選択・判断を促したい。

選択をせまるような議論がないと、どの事業も良い取り組みとして終わってしまう。そうではなく、社会的事象の見方・考え方を働かせながら議論し、それぞれの事象を見つめさせることを通して、よりよい選択・判断ができる力を育てていくことができる。



図2 社会的事象の見方・考え方をういて選択・判断する一場面

議論し、それぞれの事象を見つめさせることを通して、よりよい選択・判断ができる力を育てていくことができる。

Ⅲ 研究の柱を取り入れた指導の実際について

1 単元の構成について

- (1) 単元名「国土の環境を守る～有明海を元気にしよう～」(対象 第5学年 実施時期 令和元年11月)
- (2) 育成を目指す資質・能力

本単元では、「我が国の国土の自然環境と国民生活との関連についてパフォーマンス課題を追究・解決する活動」を通して資質・能力を育てていく。

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
人々が国土の自然環境に適応しながら生活や産業を営んでいることや国土の環境を守り健康な生活を維持・向上させていくために環境問題や公害の防止に努めていることを理解すること。	環境問題や公害に対して, 県が推進している取組や地域住民が行っている取組について議論し, 重視すべき取組を複数の立場で考え, 選択・判断すること。	資料から社会的問題に気付き, 解決に向けて学習計画を立てようとする。また, そのための活動(調べ学習や対話など)に最後まで取り組み, 自分の意見を形成しようとする。

(3) 単元の流れ

段階	時	学習活動	教師の働きかけ(○)と主な形成的評価(◆)
つかむ	1	<ul style="list-style-type: none"> 公害について知り, その大変さと人々の努力を理解する。 資料①「水俣病とわたしたち」 水俣市立水俣病資料館	○ 資料「水俣病とわたしたち」を活用し, 水俣病の起こった原因や再生への取組について理解できるようにする。 ◆ 産業の発展により有害な影響を及ぼす公害が発生し, 国民の健康や生活環境が脅かされてきたことを理解している。【知】
	2	<ul style="list-style-type: none"> 資料から気付きを出す。 イメージマップから学習計画を立て, パフォーマンス課題を設定する。 	○ 「漂着ごみ」「のりの色落ち」の2枚の写真から児童のつぶやきを拾い, イメージマップを作る。 ○ 学習計画やパフォーマンス課題を導くことができるように, イメージマップから「調べたいこと」「関わる立場」などを分類する。 ◆ 有明海を取り巻く環境に関心を持ち, 学習計画を立てようとしている。【主】
調べる	3	<ul style="list-style-type: none"> 資料を活用して調査する。 資料②「わたしたちの環境」 佐賀県県民環境部環境課	○ 資料「わたしたちの環境」を活用し, 公害問題を身近に感じさせ有明海を取り巻く環境と関係付けを図る。 ◆ 現状を知り, 水温の上昇や漂流するゴミの影響を受け, 環境が悪化していることを理解している。【知】
	4	<ul style="list-style-type: none"> 調査したことを共有し, 確かめる。 	◆ 水質汚濁や土壌汚染などの公害問題が実際に身の回りで起きていることを資料から読み取っている。【知】
	5 6	<ul style="list-style-type: none"> 資料を活用して, 原因や対策を再調査する。 必要に応じて インターネットの活用	○ 必要に応じて, 教師から資料を提供したり, インターネットを活用したりして調査することができるようにする。 ◆ 関係の諸機関をはじめ多くの人々の様々な努力により公害の防止や生活環境の改善が図られていることに気付いている。【思】 ◆ 県や市が行っている環境に対する取組を, 資料から正しく読み取っている。【知】
高める	7	<ul style="list-style-type: none"> 解決策について, 最初の選択・判断を行う。 	○ 解決したい問題点について, 自分の考えの中心となるものを決めるために, 最初の選択・判断を促す。 ◆ 調査してきたことや共有したことをもとに, 比較・検討をした上で, 問題点についての解決策を選択・判断している。【思】
	8	<ul style="list-style-type: none"> 同じ考えをもった児童と交流し, 考えを深める。 柱2	○ 解決策を練る場面を設定し, 同じ考えの児童同士で考えを深めることができるようにする。 ◆ 解決策が提案できるように, 考えを整理している。【思】
広める	9	<ul style="list-style-type: none"> 議論を行い, 考えを良くする。 	○ 考えが分かるように, 主張を明確にし, 根拠やその理由を述べるように促す。 ○ 比較したり, 関連付けたりすることができるように整理して板書し, 思考の可視化を図る。 ◆ 自他の考えについて, 多角的に見たり, 原因と解決策を関連付けたりしながら考えている。【思】
	10	<ul style="list-style-type: none"> 解決策について最終的な選択・判断を行い, 意見文を書く。 	○ 調査してきたことや議論の内容を振り返って最終的な選択・判断を促し, 意見文を書くことができるようにする。 ◆ 複数の立場から考え, 取組とその効果を意見文に書いている。【思】
	11	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りを行い, 評価できる点と課題になる点に気付き, 次の学びへの関心を高める。 	○ ルーブリックを基に自己評価・相対評価を行かせた後, 外部評価を知らせる。 ◆ 佐賀県県民環境部の方の外部評価を参考に, 自分の意見文を振り返る。【主】

(4) パフォーマンス課題とルーブリック評価表

(パフォーマンス課題) 有明海で起きている問題点 について原因を調べ、県や 市が行っている対策に意見 しよう。県庁環境課のみな	意見文のポイント		
	考えた立場の数	効果の大きさ	根拠とその理由
☺	消費者・販売者・生産者・地域の 人・私たち・観光客等 →3以上	環境（生活）が良くなる可能性 →大きい	複数の資料を使って根拠とその理由 を踏まえた意見を述べている
◎	消費者・販売者・生産者・地域の 人・私たち・観光客等 →2	環境（生活）が良くなる可能性 →中くらい	資料を使って根拠とその理由を踏ま えた意見を述べている
○	消費者・販売者・生産者・地域の 人・私たち・観光客等 →1	環境（生活）が良くなる可能性 →小さい	根拠や理由がないけど考えを述べて いる

(5) 抽出児について

学級の中から3名を抽出し（表1）、変容を見ていく。自分事として社会的問題解決を実践しようとしているかどうかを姿として追いたい。

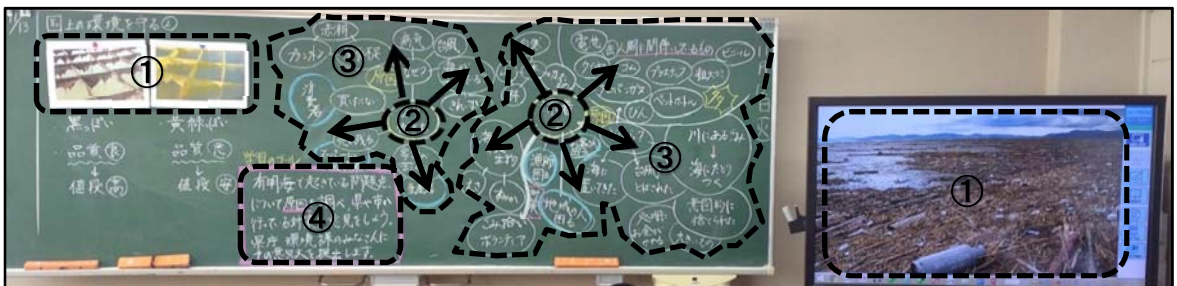
表1 抽出児のプロフィール

	①学習状況②前単元のパフォーマンスについて
M児	①授業中の発言回数は少なく記述量も少ない。②食料自給率を上げるための取り組みについて、調べたことを基に、工夫した取り組みができないかを考え、意見文にすることができた。しかし、視点は少なく、立場も少なかった。ルーブリックで評価をした結果、C（低い評価）となった。
Y児	①授業中の発言回数は多く記述量も多い。②食料自給率を上げるための取り組みについて、調べたことを基に、複数の視点から工夫した取り組みができないかを考え、意見文にすることができた。ルーブリックで評価をした結果、Bとなった。
S児	①授業中の発言回数にはムラはあるが他の人が発想しないような発言内容である。記述量は少ないが的確である。②食料自給率を上げるための取り組みについて、調べたことや経験を基に、複数の視点や立場から取り組みの提案をすることができた。ルーブリックで評価をした結果、A（高い評価）となった。

2 授業の実際

(1) 柱1における教師の働きかけと児童の反応

児童の意見を取り入れるためのきっかけとして、教師側から資料を提示した（資料1-①）。本単元では、有明海で養殖された海苔の写真（色落ちしているものとそうでないもの）を提示し、児童のつぶやきを拾った。「あれっ、色が違う」「いつも食べているのは黒っぽいけど、どう違うのかな」と2枚の写真を比較しながら児童はつぶやき続けた。教師から「問題点は何か」と問うことで、「海苔の色落ち」という社会的問題を見いだすことにつながった（資料1-②）。そこから、「なぜ、色落ちしたのだろう」「原因は何かな」「海がよごれているのかな」「生産者さんは困る」「高く売れない」「消費者も買いたくない」のように、児童のつぶやきからイメージマップを作っていくことで（資料1-③）、学級全体の思考の広がりや可視化を図った。また、漂着ゴミが多い有明海の写真を見せ、同様に進めた。そして、そのマップを見ながら、児童は学習計画を立てた。「問題点をはっきりさせたい」「県や市で取り組みがあるのかを調べたい」「何とか解決できないのか」という意見を取り入れ、パフォーマンス課題を設定した（資料1-④）。児童の意見を取り入れながら、単元の計画を作っていくことで自分事とした学びが展開できるように仕組んだ。



資料1 柱1にかかわる板書と提示資料

(2) 柱2における教師の働きかけと児童の反応

調査を終え、パフォーマンス課題に対する考えをもてるようになってきたときに議論の場を設定した。

今回は、社会的事象の見方・考え方を働かせるための1つの手立てとしてLPを招くこととした。LPとはラーニング・パートナーと言い、児童と共に学んでいただく立場の人である。単元当初は誰をLPとするかを迷っていた児童であったが、調査を進めるにあたり「わたしたちの環境」という佐賀県県民環境部環境課から発行されている副読本を扱ったり、インターネットを活用して佐賀県庁のホームページを見たり、家の人や地域の人に聞いたりしてきたところ、県の取り組みを考えたり実行したりしている県庁の人が適任であることを口にするようになったため、県庁の方に来ていただくこととした。論題については、良いのを決めるのではなく、それぞれの考えをさらに良くしていくための議論にしたいという児童の思いを重視した。提案したい取り組みをできるだけ具体化して考えたり、質問されても応答できるように根拠を明らかにしようと資料を再度読み直したり、視覚的に分かりやすく自分の考えを伝えようとタブレット端末を活用したりするなど、「さらに良くする」という論題やLPの招聘から児童の主体性が増したように感じた。

議論をコーディネートする教師の役割として、板書による思考の可視化と社会的事象の見方・考え方を働かせた児童への



資料2 柱2にかかわる板書

価値付け、LPとのつながぎを考えていた。例えば、教師が児童の考え（取り組みの提案）とその問題点を矢印で結ぶことで関連付けに目を向けさせ（資料2）、児童はその関連付けの妥当性について意見を出したり根拠の明確さについて語ったりした。また、「費用」「環境」「利益」など社会的事象の見方・考え方につながる発言についてはチョークの色を変えて板書し、LPとつなぐことで、新たな視点（資料3-□囲み）で考えることができるようにした。

- T:自分たちの考えをより良くするために議論をしましょう。では、C1さんから、提案をどうぞ。
- C1:私は、有明海の漂着ゴミの多さが気になっています。漂着ゴミの多くは、生活に関するものばかりです。例えば、プラスチックや紙類。だから、私は町でポイ捨てが多いと判断しました。そこで、インドの万華鏡ゴミ箱やロンドンの投票式ゴミ箱などの「ゴミ箱の応用化」というのをこの佐賀県からどんどん全国、世界中に広めてはどうかと思います。なぜなら、そうゆうゴミ箱が町中にあつたら、みんなゴミを捨てるのが楽しくて絶対ポイ捨てがなくなり、ポイ捨てという言葉すら、この世から消え去ると思うからです。
- T:意見はありませんか。
- C2:ぼくはロンドンのゴミ箱を投票する案に賛成です。わけは、面白い質問を書いていたら、投票も楽しいし、ポイ捨て防止にもつながるからです。
- C3:私も良いと思います。そのゴミ箱にゴミを捨てるのが楽しくなると捨てるのが習慣付くと思います。そして、海に流れてくるゴミが少なくなることにつながると思うからです。もちろん、完全になくすというのは難しいと思うのですが、少しでもゴミをなくし、有明海を良いものとしたいのです。
- C4:欠点があると思います。設置するのに費用がかかるということです。県庁の方の意見を聞きたいです。
- T:そうですね。LPさん、子供たちの発言についていかがでしょうか。
- LP:とてもユニークな取り組みですね。そのようなオリジナリティのあるゴミ箱を設置することができれば、ポイ捨てが減り、また、それ自体がゴミのポイ捨てについて考えるきっかけとなるでしょう。ただ、簡単に見えて、内容、場所、予算、設置期間など、ゴミ箱の設置についての課題は多く、すぐには実現できません。まずは、学校の行事等で作成、設置を試みてはどうでしょうか。
- T:C4さん、どう思いますか。
- C4:費用がかかるかもしれませんが、ゴミを後から拾うという手間を考えると良いのではないかと思いました。
- T:「費用」と「手間」を比べて考えることができましたね。

資料3 議論の様子

資料4から分かるように、最初から思いついたような取り組みを提案するのではない。市や県が行っている取り組み、ゴミが少ない市や県の取り組み、世界を見渡した取り組みというように、空間的な広がりをもった見方(資料3波線部)ができるようになってきている児童。成功事例を探して、それを佐賀県でも取り組むことができないか、元々あった取り組みを改善することができないかと試行錯誤している児童。論理的に関連付けて考える(前頁資料3網掛け部分)ことができる児童。このような学び方は社会的問題解決を実践しようとするれば、自ずとできていくと考えることができる。

(2) 単元を通した児童の学び方について

学習計画を立てたことで、次時から児童は見通しをもって調べていくこととなったはずである。単元の流れに沿って進めるにあたり、児童がどのような感想をもったかを振り返りの記述(資料4)から分析する。振り返りは、自由記述とした。

	調べる(3時目)	調べる(4時目)
M児	有明海では、人の手で破かいされるものが多く、外来種に在来種が食べられたり住む場所がうばわれたり、人工物が多いです。また、昔みたいに多くとれるようにしたいです。	在来種をおそっているのは、やはり人工物や外来種だとはっきりして、在来種の巣の中に小さなゴミでも入っていると困るのでこれ以上進行しないようにしたいです。
Y児	今日は、3つの原因について調べた。原因を調べるためには、どこを調べたらよいか分からなかったから1つしか原因をさぐれなかった。	漂着ゴミの原因についてもっとよく調べたら分かった。あと、のりの色落ちを調べたらもっと分かると思った。
S児	実は有明海に流れつくゴミの多くは川から流れこむことが分かった。そのゴミで漁船などの漁業活動に大きな支障をきたしている。生物の生息の場をうばっている。	人間がポイ捨てをしたゴミが川や水路から有明海に流れてくることが分かった。ということは、ポイ捨てがなくなれば有明海はきれいになる？

資料4 抽出児の振り返りの記述(3・4時目)

M児は、解決したい(資料4-M児下線部)という思いが強く表れている。原因が明確になった(資料4-M児波線部)ことも分かった。Y児は、自分の現状(資料4-Y児下線部)と課題(資料4-Y児波線部)について記述していた。S児は、因果関係を理解し、抽象的ではあるが解決策(資料4-S児下線部)まで導くことができていた。

	調べる(5時目)	調べる(6時目)
M児	漁かく量がまた増量するためには、いろいろな解決方法が必要です。ゴミ・殺きん剤?などをやめなければなりません。	有明海の二枚貝が減っている理由をまた調べて、どうやったら増えるかもっと考えたいです。
Y児	Sさんが、漂着ゴミを減らすための解決策がすごくざんしんでおもしろかった。外国では、そんなおもしろい取り組みをしているから、日本もぜひまねをした方がいいと思う。	ゴミを減らすための工夫を調べようと思ったけれど、川に木などが流れることにも関係があると思い調べてみました。一番いいと思った案は「砂防ダム」みたいな感じで木をためて、そのたまった木は再利用すればいいと思った案でした。
S児	僕は、ナルトビエイをくじよせず食べるという意見がとてもよいと思った。これが実現すれば貝は増える？	世界にはおもしろいゴミ箱があり、ゴミを入れるとテトリスがスタートしたり、ふたにダンベルがついていてあけるのがむずかしかったり、投げ入れたりするものがあった。いろいろなものを取り入れていきたい。

資料5 抽出児の振り返りの記述(5・6時目)

M児は、3時目からの思いをもち続けていること(資料5-M児波線部)が分かる。解決するためには問題が複数存在すること(資料5-M児下線部)も分かっている。二枚貝を増やすことを最優先にしてい

ることが読み取れる。Y児は、友達と考えを共有し、中でもS児の解決策に共感している（前頁資料5-Y児下線部）ことが分かる。6時目には、違う解決策を考えている（前頁資料5-Y児波線部）ことが分かり、どのような選択・判断をしていくのかが興味深い。S児もY児と同様に、自分とは違う解決策に共感し（前頁資料5-S児下線部）、因果関係にも触れていることが分かる。6時目には、ゴミ箱の工夫を調べ、次時の学習に意欲的になっている（前頁資料5-S児波線部）ことが分かる。

	最初の選択・判断 (7時目)	最終的な選択・判断 (10時目)	意見文(10時目) 立場…網掛け 効果の大きさ…波線 根拠とその理由…下線
M児の反応	漁かく量の減少では、ナルトビエイが来て、二枚貝を食べてしまったたり、のりの殺きん剤が原因で、海洋汚染していきます。	のりの殺きん剤のせいでは他の生き物が生きられなくなるのでさくを作ることをしなくてはいけません。実際にナルトビエイなどが来れないように、さくなどをしてこれないようにすることもあります。なので、二枚貝を食べられないようにして南の海の貝を増やす取り組みをしたらよいと思います。	私は、有明海の生き物を増やさなければと思います。まずは、 <u>のりの殺きん剤のようなもので海がよごれ生き物が減っています。</u> 2つ目は、魚介類の漁かく量です。 <u>漁かく量が最近多かったのはH2でした。そして、一番少なかったのはH18です。やはり、取りすぎということが分かります。</u> 3つ目は、赤潮です。 <u>赤潮は有明海にまで入ってきています。プランクトン大量発生をとめなければ魚がどんどん減っていき、とうとういなくなってしまうというように魚を在来種を守らないといけません。</u> プランクトン大量発生の原因は、下水道の整備です。下水道でさえきちんとすれまいいというわけではありません。しかし、 <u>被害は少なくなります。</u>
Y児の反応	ロンドンでもやっているように、ゴミ箱を投票箱にすればいいと思う。人間はなぜかざんしんなものや自分でやるものに興味を引かれるから町のゴミが減ると漂着ゴミも減ると思う。	有明海に打ち上げられた漂着物が流木などが大半をしめていて、有明海に流れこむ前に砂防ダム改めて木防ダムみたいなどを作ればいいと思う。たおれてきた木が家にたおれてきたりしたら、地域の人も困る。その家の前などに設置すればわたしたちもうれしいし、観光客もきれいな佐賀県を見ることができる。	私は有明海にある漂着物が流木が多いと知り、その流木を有明海に着くまでに止められないかと考え、砂防ダム改めて木防ダムを設置するのがいいと思う。有明海に住む生き物たちも困らないと思うし、有明海を覗にきた観光客もきれいな海辺の方がいいはずだ。また、止めることができず、山の上や有明海につながる川の周辺に住んでいる地域の人は木がたおれ、大雨などで車や家に激突してこわれてしまうかもしれない。そのためにも木防ダムは必要だと思う。そこにたまっていく木は、処分するにはもったいないので、木を使って物を作る生産者に引き渡し、再利用すればいいと思う。ただ、1つ問題なのがコストが高いということだ。わたしたちの命とお金どっちが大切なのだろうか。そこをのぞけば有明海をきれいにする1つの方法だろう。
S児の反応	町中でゴミのポイ捨てがあるから増える。ロンドンのたばこのすいがら入れが投票箱だということをゴミ箱に応用する。	有明海の堤防沿いにある道(歩道など)や流れこむ川のとなりにある道などに投票ゴミ箱を置いたりすれば道や川へのポイ捨てが減ると思う。	ぼくは、有明海の漂着ゴミの中で生活ゴミが多いのでポイ捨てされるゴミを減らすために有明海沿いにある道や有明海に流れこむ川の近くにある道に、「投票ゴミ箱」をおけばいいと思います。例えば、「鍋島直正と島義勇だったらどっち」という質問があり好きな方に入れるという図1のような形です。しかし、ペットボトルとキャップは分別しなければいけないときは、ボトル用とキャップ用のゴミ箱を用意すればよいと思います。このように、「投票ごみ箱」を設置すればポイ捨てが減り有明海に流れこむゴミが減り、有明海の漁師さんや有明海に来る観光客のみなさん、そして近くに住む方々に好影響を与えるのではと思います。

資料6 抽出児の記述(7・10時目)

M児は、二枚貝を増やすことが漁獲量を増やすことにつながると考え、のりの養殖時に使用される薬の制限をしたり、魚の取り過ぎに気を付けたり、赤潮発生を防ぐために下水道の整備を進めたりできないかと意見を出している。意見文としては、効果の大きさについての記述は少なく、考えている立場も少なかったので評価はCとした。Y児は、最初の選択・判断と最終的な選択・判断で考えが変わった。一番の理由は、漂着ゴミの多くが流木であるということのを再認識し、それを解決することを優先すべきだと考えたからである。意見文としては、考慮した立場の数や得られる効果の記述が多く、評価はAとした。解決策に対する問題点も提起しているところは流石である。S児は、漂着ゴミの中でも生活ゴミに目を向け、その減少方法を考えた。9時目に行ったLPとの議論を生かし、最初の選択・判断では考えていなかった「分別」「設置場所」について、意見文に加えることができた。意見文としては、考慮した立場の数や得られる効果の記述が多く、評価はAとした。具体性があり、LPからの評価も高かった。

IV 考察

児童は、自分事として社会的問題解決を実践することができたのであろうか。抽出児の記述を追うことで他人事ではなく、自分事とした学習ができていたことを感じた場面が多々あった。例えば、M児の「これ以上進行しないようにしたい」の記述。この記述は、対策を講じなければ危うい状況であるという危機感がある。また、Y児の『砂防ダム』改め『木防ダム』の記述は、取られている対策を応用している。このような記述は、「自分たちで社会的問題を解決していかなければならない」という市民としての思いが育まれていることを感じずにはいられないし、社会的問題解決を実践しようとしている姿であると考え。資料7は、単元を通して、自分事として取り組めたかどうかを表したものである。「0は自分事として捉えられない」「5は自分事として十分に捉えている」状況であることを理解した上でアンケートを行った。一番大きい数値のときは、意見文を書いた学習のときである。また、学習が進むにつれ、自分事の数値も大きくなっていく傾向にある。数値の高まりが大きいのは、2時目の次である。柱1の手立てが有効であったことがいえるのではないだろうか。



資料7 学級全体の変容(平均値の推移)

V 研究の整理(まとめ)

1 研究の成果

- ・教師が単元の全てを仕組むのではなく、児童と共に学習を作ることが「自分事」として学習する主体的な学びの展開につながった。
- ・児童は、議論をすることで、根拠が明確になったり、多角的に考えたり、考えが変わったりした。試行錯誤をする状況を仕組むことは、児童の社会的事象の見方・考え方を働かせる手立てとなった。

2 今後の展望

- ・LPとの関わりをもったり、意見文を関係諸機関に提出したりすることで、教室の外に目を向けることができた。社会に開かれた教育課程の実現を担う教科の一つとして、先進的に取り組みたい。

【参考文献】

- 澤井陽介 「小学校社会 授業を変える5つのフォーカス 『よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎』を培うために」 図書文化社 2013年
- 佐長健司 「社会変革へ向かう学習を求めて -正統的周辺参加における拡張による学習-」 佐賀大学教育学部研究論文 第一集 第1号 2016年